

「子どもだから長い時間をかけて勉強させず、短い時間で効率よくやらせる。その体験自体も楽しいものでなくてははいけません。うちの教室では子どもを決して怒らない。褒めて、おだてながら調子にのせてがんばらせるんです」

「アンテナ・プレスクール」校長の石井至は、東京大学医学部を卒業後、外資系銀行、証券会社などを経て、コンサルティンク業を起業。その後、受験産業に参入したという異色の経歴を持つ。きっかけは長男の「お受験」だった。自身は北海道の田舎で育ち、公立校しか知らない。そのため塾を見に行ったり、体験学習を受けさせるなかで「あまりにもお粗末な授業と法外な料金」に啞然とすることが多かったという。

受験期の子を持つ知人に情報を送るうち、授業をしてくれないかと請われて、プライベートレッスン主体の塾を開設。グループレッスンでは入試本番と同じ時間で流れに沿った授業をする。アルバイトの講師は使わず、絵画は美大出身者が指導していた。

「幼稚園では子どもらしさや元気の良さ、物怖じしない明るさなどを見られていると思います。だから、家で教えようと思えばできるけれど、お絵描きは難しい。どんなに優秀な子でも初めてのことはずっとできないもの。しかも試験に出ている画材や道具は特殊だから個人では入手できないものがあるし、買うとしてもお金がかかり、場所も必要になる。

幼稚園が子どものどこを評価して点をつけているかわかりませんが、お絵描きでいえば、試験のなかで先生は子どもたちに質問をするんです。先生が聞きたくなるような絵を描くことが大事だから、その子なりの個性やオリジナリティーが出ていないとダメだし、色使いや構図の取り方も大切なのです」

独自の指導のもと、「コネがなくても合格する」ことを謳っている。これまで取材で会った卒業生に聞けば、やはり父親や祖父もOBという人は多かったが、実際にはどうなのか。「確かに在校生の親御さんには幼稚園出身という人も少なくはないけれど、うちの教室では大学も慶應ではないという人が圧倒的に多いんです」

両親が共働きで保育園に通っていた子どもも合格しており、同校で幼稚園に受かっているのは普通のサラリーマン家庭が多いという。幼稚園を受験させる親たちの意識も変わつつあると石井は指摘する。

#### 「開かれた学校」への改革

近年の幼稚園で最も大きな変化があったのが、一九代の金子郁容舎長の時代といわれる。一九九九年から二〇〇二年度までの四年間、幼稚園長をつとめた金子は、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授と兼務。幼稚園出身ではあったが、現場での教員経験は